



本日の
プログラム

コロナ禍の中での食品への新しい挑戦 張 相律 会員

難民が安心して暮らせる世界づくり 財団奨学生 川原夢果さん

パリの仲間のために、何ができるか
本稿を執筆している2021年8月15日現在、アフガニスタン・カブールがタリバンの手落ちた。刻々と変わるアフガニスタンの現状は2015年の欧州難民危機を彷彿とさせ、パリ留学時代に支援した難民の姿が走馬灯のように蘇る。

2019年の初冬、パリ北部。身を着る寒さの中、いつものように難民キャンプにて支援を行っている、キャンプ入り口近くに集住していたソマリア人のグループが「一緒に薪で暖を取らないか」と声をかけてくれた。ブリキ缶に木材や(どういうわけか)アルミ缶などを無造作に入れた焚き火を囲みつつ、彼らはソマリアについてやソマリア語、夢、そこでの暮らしなどを話してくれた。この時彼らがかけてくれた言葉を私は一生忘れないであろう:「君達と話すのはとても力になるよ、またいつでも来ていいからね!... あ、あと僕に新しい靴を持ってきて、サイズは42だから。」残念ながら中間テストに追われていたこともあり、次の活動日に彼らを訪ねることはできなかったが(そして私の同僚が彼にサイズ42の靴をちゃんと渡してくれたのかも定かではないが)、その後再びキャンプを訪ねた時、彼らは「こんにちは」という日本語とともに温かく私を迎え入れてくれた。さらに彼らだけではなく、他のキャンプの住民も私たちをいつも家族同様に扱ってくれた。パリでの最も印象に残った経験の1つだ。

彼らが私にかけてくれた温かい言葉の数々は私の脳裏に焼き付いており、一生忘れることはないであろう。同時に私は、難民問題に根本的解決策を示さない国際社会に怒りすら覚えるとともに、「難民」とラベルを貼られ一緒にたにされてしまう彼らも、謳歌すべき人生をもつ一人ひとりの人間であること、そして私たちはそのことを常に忘れがちなことを、痛いほどに学んだ。キャンプにいる皆は私たちと同じ家族や夢を持つ「個」であり、この悲惨な状況は即座に改善されるべきである。しかしながら社会の大部分は、彼らが無意識に「難民」という枠にはめ込み、その「個」には無関心になってはいないだろうか。私たちは「幸運にも」裕福で平和な国に生まれたため文化的な生活が営んでいるのであり、ただそれだけの理由で世の中の悲劇は無関心であってはならない。仮にそれが許されるのなら、

生まれる場所や環境は本人が選べるものではないにもかかわらず、その責任を彼ら自身に着せることになり、これは到底許されないことではないか。全ての社会がこれらの問題に責任を負っており、私たちこそがこの状況を改善できる主体であるという認識を持つべきなのではないだろうか。

同時に、ローカルNGOでの難民支援活動を効果的に行うのがいかに大変か、ということにも改めて実感した。私のパリでの活動は、もちろんパリのキャンプの住民にとって必要なものではあるものの、根本的な解決策というわけではない。住民一人ひとりの名前が分かり、彼らのニーズも把握している一方、NGOにはやはりリソースの限界がある。ローカルNGOと政府の効率的な協調関係が築かれな限り、現場支援活動は一時的な解決策でしかない。今にも水が溢れそうなお風呂を前に、ローカルNGOは蛇口を締めることはできず、バケツで水を汲んでいくことしかできないのだ。もちろんこれはフランスに限った話ではない。さらに最近では、多くのヨーロッパ諸国が難民に対して国境管理を厳しくしており、難民の社会統合政策も国民の不支持や各国のキャパシティを超えるなどの理由から崩壊しつつある。多文化共生の基礎も揺らぎつつあるのが現状だ。

このような想いを胸に、私は今年9月からフレッチャール法律外交大学院にて、難民保護の円滑化のためにNGOと政府はどのように協力すべきなのか、というテーマのもと研究を行う。大雨の降るパリのキャンプにてぬかるみに足を取られる私たちに、自身は泥だらけになりながらも手を貸してくれた仲間達。彼らのために、そして今も故郷を追われ苦境に立たされている人々のために、私は今何ができるだろうか。常に自問自答し、これからの大学院での2年間、そしてもちろんその後も日々精進していきたい。



■本日のロータリーソング
君が代、四つのテスト

2021~2022年度 国際ロータリーのテーマ
「奉仕しようみんなの人生を豊かにするために」
国際ロータリー会長：シェカール・メータ